

んでいく。体力があつても、心の方が続かなくなっていく。身体のケガは治るけれども、心のケガは今でもなかなか消えなっています。



事務所内の様子

## 大槌町社協概要

- 名称：社会福祉法人大槌町社会福祉協議会
- 住所：大槌町大町9-50
- 法人職員数：59名
- 介護保険事業所  
介護サービスステーション  
(居宅介護事業所・訪問介護事業所・訪問入浴介護事業所)  
大槌町デイサービスセンターはまぐく  
小規模多機能型居宅介護事業所 ほっと おおつち  
小規模多機能型居宅介護事業所 ハイス こづち
- 障がい福祉サービス事業所  
就労継続支援事業所(B型) ワークフォローおおつち

【徳田会長】やはり、「我が家」というか本設の事務所というのは、職員の気持ちも落ち着くと思います。生活支援相談員も少なくなりましたが、同じ場所で業務ができるることは良いですね。

【中村事務局長】仮設事務所は、1階と2階に職員が分かれているので、職員同士、若干の不便さを感じていたところがあつたんですね。新しい事務所は、平屋建てでワンフロアなので、お互いに情報を共有で

きるようになつて、以前よりも業務を進めやすくなつたところはありますね。

## 大槌町の地域福祉の拠点として

—新しい事務所へ移転していかがですか？

【徳田会長】小さい事務所だけれど、ここ

を起点として地域福祉の中心になつていけたら良いと思います。これからですね。

【中村事務局長】福祉は、地域住民の問題が様々あるので、広く目を届かせる必要があると思います。行政的に大変なことがあれば、我々に相談してもらうなり、行政ができないことであつて我々が対応できるのであれば手伝っていただきたい、協働していくきたいと思っています。

令和4年度岩手県保育研究大会が6月7日、9日、10日の3日間、Web配信形式で開催され、県内の保育施設職員23名が各研究テーマに沿つて発表を行いました。

この大会は、保育・子育ての制度動向や社会福祉法人に求められる責務への理解を深め、保育の取組みを充実させるとともに、養護と教育の実践のもと、これまで培ってきた保育の営みの深さを広く社会にアピールすることを通して、子どもにとって最善の利益となる保育を提供していくため、保育の役割と実践について研究することを目的に開催されました。

発表者の取組みについて、一部紹介します。

すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現をめざして

# 令和4年度岩手県保育研究大会

**大上愛莉さん**（葛巻保育園分園江刈保育園保育士）  
7月、園児は、スイカから2種類の葉が出ていることに気付き、図鑑で調べても1種類しか載っておらず、謎は深まるばかり

## 子どもの主体性を育む保育を探る

り。「水をたくさん吸った葉は丸い形になる」「他の野菜も大きくなれば違う形の葉が出てくる」など予想し、この疑問を宿題として持ち帰つて家族と取り組むことにしました。家族は園での子どもたちの様子に興味を持ち、楽しみながら「かぼちゃの苗に接木?」「何らかのウリ科の植物へ接木?」など一緒に答えを探るもの、子どもたちにとつて「接木」はイメージしない様子。そこで、畑に詳しいおばあちゃんを招待し、接木を教えてもらいます。



## 子どもが夢中で遊び込める環境を 模索する



佐藤祐太さん（花巻市立成島保育園主査）

夏祭りごっこへの準備に取り掛かる5歳児は、チョコバナナやかき氷などを何でてくるかアイデアが出ず、話し合いが進まない様子。保育士は、子どもたちの姿を図や写真から読み取り、職員間で協議した内容を付箋に記録していきます。そこで、「ペンやハサミ等の用具はすぐに取り出せる位置にあるけど、素材は見えにくいため、思いついたことを試せないので？」と考察し、綿やカット、毛糸、アルミホイル等の素材を種類ごとに分け、子どもが見えるように置き、環境の再構成を実践しました。すると、園児は「これ使ってみよう！」と試し始めるなど、繰り返し遊ぶようになりました。

保育者は、「発想→予測→調べる→新たな疑問→観察」の手順を大事にし、あくまで助言やサポートをするのみ。疑問を宿題として家庭に持ち帰ることで、保護者まで活動の輪を広げられたことは、これまでの型にはまつた保育とは違う機会になりました。また、子どもたち自身から「やりたい・こうしたい」という思いが表されるようになり、日々の保育を保育者主体から子ども主体で進めることができますようになりました。

## 「開かれた保育園」で地域との つながりを

木村暁朝さん（飯岡こども園主幹保育教諭）

毎年、園では、保護者の畠でサツマイモ栽培させていただいています。

園児は、収穫した大きなサツマイモを隣接する児童センターの館長や小学生に見せたい様子でしたが、コロナ感染のリスクがあるため直接出向くことは難しいと判断しました。園児に尋ねると、「手紙を書きたい」という声があがつたことから、サツマイモをなぞった实物大の絵に測った重さ、太さを添えて手紙を送りました。

翌年、コロナ感染症の影響で休園になりました。秋の収穫では、児童センターの館長を招いて焼き芋会を開催し、地域との交流を深めることができました。

様々な事例検討を通して、保育の可視化をすることで情報共有や保育感の違い。改善点に気付くきっかけとなり、子どもが反応や環境への関わりを多面的に捉え、次の環境構成に活かせるようになります。また、園児は保育者や友達とのやりとりが増え、やりたい遊びを繰り返し楽しむようになるなど、保育の質の向上に結び付いています。

地域の拠点となるべき頼られる園と

なることで、災害対応、虐待防止、インクルーシブな社会の実現など様々なところで協力し合います。人と人・自然・資源が世代や分野を超えて「丸ごと」つながる地域共生社会の実現のためにも、園からの情報を積極的に発信し、保護者や地域の理解を得ることが重要です。

### 優秀発表者

分科会①：中屋敷 智子さん（山口保育園）

「キッズヨガが子どもの体にもたらすもの～心と体の健康を考える～」

分科会②：高橋 聰子さん（湯本保育園）

「食べることは生きること  
～子どもたちが生涯にわたり、心も体も健康で安全な生活を送るために～」

分科会③：佐藤 理恵さん（ふたば認定子ども園双葉幼稚園）

「子どもの安全を考える保育～職員の危機管理意識を高める～」

分科会④：大上 愛莉さん（葛巻保育園分園江戸川保育園）

「主体的に活動できる子を育てるために～子どもと保育者が共に育つ～」

分科会⑤：木村 暁朝さん（飯岡こども園）

「園と保護者と地域が共有できる新しい地域づくりのつながりを求めて  
～地域がみんなの協働の力で蘇る～」